

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄								備考	
計画の区分	研究科の設置									
フリガナ設置者	ガクコウカクジン メイジダガク 学校法人 明治大学									
フリガナ大学の名称	メイジダガクガクタイン 明治大学大学院 (Meiji University Graduate School)									
大学本部の位置	東京都千代田区神田駿河台一丁目1番地1									
大学院の目的	学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究め、又は高度の専門性の求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を養い、文化の発展に寄与することを目的とする。									
新設学部等の目的	国際的視点を持ち世界における日本を深く認識し、その認識に基づき的確に行動できる人間を育成することが重要であるという考えに立脚し、日本の文化及び社会システムを国際的な視点に立ち理解し、異文化及び多様な社会システムを理解するとともに、自らの意思を言語によりの確に表現することができる研究者の育成を目指す。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	【基礎となる学部等】 国際日本学部 国際日本学科	
	国際日本学研究科 (Graduate School of Global Japanese Studies)	年	人		人	修士 (国際日本学)	平成24年4月 第1年次	【和泉キャンパス】 東京都杉並区永福一丁目9番地1 (平成25年度移転予定) 【中野キャンパス】 東京都中野区中野四丁目2		
	国際日本学専攻 (Course of Global Japanese Studies)	2	20	—	40					
計		20	—	40						
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	該当なし									
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
	国際日本学研究科 国際日本学専攻 (修士課程)	講義	演習	実験・実習	計					
		46科目	72科目	0科目	118科目	30単位				
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等	
	新設分	国際日本学研究科国際日本学専攻		教授	准教授	講師	助教	計	助手	人
				人	人	人	人	人	人	人
			17 (17)	6 (6)	2 (2)	0 (0)	25 (25)	0 (0)	2 (2)	
		計	17 (17)	6 (6)	2 (2)	0 (0)	25 (25)	0 (0)	2 (2)	
	既設分	大学院共通		6 (6)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	1 (1)
		法学研究科	公法学専攻 (博士前期課程)	20 (20)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	21 (21)	0 (0)	9 (9)
			公法学専攻 (博士後期課程)	12 (12)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	2 (2)
			民事法学専攻 (博士前期課程)	17 (17)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	8 (8)
			民事法学専攻 (博士後期課程)	15 (15)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	4 (4)
商学研究科		商学専攻 (博士前期課程)	46 (46)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	46 (46)	0 (0)	3 (3)	
		商学専攻 (博士後期課程)	37 (37)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	37 (37)	0 (0)	2 (2)	
政治経済学研究科		政治学専攻 (博士前期課程)	19 (20)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	21 (22)	0 (0)	5 (5)	
	政治学専攻 (博士後期課程)	19 (20)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	19 (20)	0 (0)	1 (1)		

教員	既	経済学専攻（博士前期課程）	27 (29)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	33 (35)	0 (0)	1 (1)
		経済学専攻（博士後期課程）	27 (29)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	28 (30)	0 (0)	0 (0)
		経営学研究科 経営学専攻（博士前期課程）	32 (33)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	38 (39)	0 (0)	0 (0)
		経営学専攻（博士後期課程）	28 (29)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	28 (29)	0 (0)	0 (0)
		文学研究科 日本文学専攻（博士前期課程）	6 (6)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	1 (1)
		日本文学専攻（博士後期課程）	6 (6)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	0 (0)
		英文学専攻（博士前期課程）	6 (6)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	2 (2)
		英文学専攻（博士後期課程）	6 (6)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	0 (0)
		仏文学専攻（博士前期課程）	8 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	2 (2)
		仏文学専攻（博士後期課程）	8 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	0 (0)
		独文学専攻（博士前期課程）	4 (4)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	6 (6)	0 (0)	0 (0)
		独文学専攻（博士後期課程）	4 (4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (4)	0 (0)	0 (0)
		演劇学専攻（博士前期課程）	2 (2)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	4 (4)	0 (0)	0 (0)
		演劇学専攻（博士後期課程）	2 (2)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	4 (4)	0 (0)	0 (0)
		史学専攻（博士前期課程）	19 (19)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	20 (20)	0 (0)	8 (8)
		史学専攻（博士後期課程）	19 (19)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	0 (0)
		地理学専攻（博士前期課程）	6 (6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (6)	0 (0)	1 (1)
		地理学専攻（博士後期課程）	6 (6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (6)	0 (0)	0 (0)
		臨床人間学専攻（博士前期課程）	12 (12)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	17 (17)	0 (0)	14 (14)
		臨床人間学専攻（博士後期課程）	9 (9)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	1 (1)
		文芸メディア専攻（修士課程）	4 (4)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	6 (6)	0 (0)	0 (0)
		情報コミュニケーション研究科 情報コミュニケーション学専攻（博士前期課程）	12 (12)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	23 (23)	0 (0)	5 (5)
		情報コミュニケーション学専攻（博士後期課程）	7 (7)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	0 (0)
		教養デザイン研究科教養デザイン専攻（博士前期課程）	27 (27)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	29 (29)	0 (0)	2 (2)
		教養デザイン専攻（博士後期課程）	22 (22)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	24 (24)	0 (0)	0 (0)
		理工学研究科 電気工学専攻（博士前期課程）	16 (16)	8 (8)	2 (2)	0 (0)	26 (26)	0 (0)	4 (4)
		電気工学専攻（博士後期課程）	16 (16)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	0 (0)
		機械工学専攻（博士前期課程）	17 (17)	6 (6)	4 (4)	0 (0)	27 (27)	0 (0)	2 (2)
		機械工学専攻（博士後期課程）	17 (17)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	0 (0)
		建築学専攻（博士前期課程）	9 (9)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	13 (13)
		建築学専攻（博士後期課程）	9 (9)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	0 (0)
		応用化学専攻（博士前期課程）	8 (8)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	3 (3)
		応用化学専攻（博士後期課程）	8 (8)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	0 (0)
		基礎理工学専攻（博士前期課程）	24 (24)	9 (9)	1 (1)	0 (0)	34 (34)	0 (0)	24 (24)
		基礎理工学専攻（博士後期課程）	24 (24)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	27 (27)	0 (0)	0 (0)
		概	分						

教 員 組 織 の 概 要	既	新領域創造専攻（博士前期課程）	9 (9)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	11 (11)	大学院共通教員 を含む
		新領域創造専攻（博士後期課程）	8 (8)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	0 (0)	
	設	先端数理科学研究科 現象数学専攻（博士前期課程）	5 (5)	2 (2)	3 (3)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	3 (3)	
		現象数学専攻（博士後期課程）	5 (5)	2 (2)	3 (3)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	0 (0)	
	員	農学研究科 農芸化学専攻（博士前期課程）	5 (5)	10 (10)	1 (1)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	6 (6)	
		農芸化学専攻（博士後期課程）	5 (5)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	
	組	農学専攻（博士前期課程）	12 (12)	2 (2)	5 (5)	0 (0)	19 (19)	0 (0)	13 (13)	
		農学専攻（博士後期課程）	12 (12)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	0 (0)	
	織	農業経済学専攻（博士前期課程）	9 (9)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	3 (3)	
		農業経済学専攻（博士後期課程）	9 (9)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	
	の	生命科学専攻（博士前期課程）	9 (9)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	10 (10)	
		生命科学専攻（博士後期課程）	9 (9)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	0 (0)	
	概	法務研究科 法務専攻	54 (54)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	55 (55)	0 (0)	24 (24)	
		ガバナンス研究科 ガバナンス専攻	11 (11)	1 (1)	3 (3)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	40 (40)	
	要	グローバル・ビジネズ研究科 グローバル・ビジネズ専攻	14 (14)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	43 (43)	
		会計専門職研究科 会計専門職専攻	10 (10)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	10 (10)	
	分	博士前期課程 合計	396 (400)	106 (106)	28 (28)	0 (0)	530 (534)	0 (0)	154 (154)	
		博士後期課程 合計	349 (353)	40 (40)	3 (3)	0 (0)	392 (396)	0 (0)	10 (10)	
	要	専門職学位課程 合計	89 (89)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	98 (98)	0 (0)	117 (117)	
		博士前期課程 合計	413 (417)	112 (112)	30 (30)	0 (0)	555 (559)	0 (0)	156 (156)	
要	博士後期課程 合計	349 (353)	40 (40)	3 (3)	0 (0)	392 (396)	0 (0)	10 (10)		
	専門職学位課程 合計	89 (89)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	98 (98)	0 (0)	117 (117)		
教 員 以 外 の 職 員 の 概 要	職 種		専 任		兼 任		計		大学全体	
	事 務 職 員		454 (454)		356 (356)		810 (810)			
	技 術 職 員		20 (20)		43 (43)		63 (63)			
	図 書 館 専 門 職 員		31 (31)		26 (26)		57 (57)			
	そ の 他 の 職 員		32 (32)		11 (11)		43 (43)			
	計		537 (537)		436 (436)		973 (973)			

校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	大学全体 その他には農場, 寄宿舎, 借用地, 附属学校施設を含 む。			
	校 舎 敷 地	226,708㎡	0㎡	0㎡	226,708㎡				
	運 動 場 用 地	241,752㎡	0㎡	0㎡	241,752㎡				
	小 計	468,460㎡	0㎡	0㎡	468,460㎡				
	そ の 他	727,193㎡	0㎡	0㎡	727,193㎡				
	合 計	1,195,653㎡	0㎡	0㎡	1,195,653㎡				
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	大学全体 平成25年度中野キ ャンプス竣工予定			
		285,979㎡ (254,464㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	285,979㎡ (254,464㎡)				
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体 補助職員にT Aを 含む			
	249 室	164 室	385 室	31 室 (補助職員158人)	26 室 (補助職員18人)				
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称			室 数				
		国際日本学研究所国際日本学専攻			24 室				
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学共有分図書 数 2,371,435 [836,341] 学術雑誌数 37,301 [13,177] 電子ジャーナル 数 31[28] 視聴覚資料は大学 全体	
	国際日本学研究所 国際日本学専攻	145,527 [50,803] (142,700 [50,066])	651 [230] (651 [230])	0 [0] (0 [0])	40,115 (39,678)	0 (0)	0 (0)		
	計	145,527 [50,803] (142,700 [50,066])	651 [230] (651 [230])	0 [0] (0 [0])	40,115 (40,115)	0 (0)	0 (0)		
図 書 館		面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数			大学全体	
		32,364㎡	4,074		2,798,257				
体 育 館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要					保存書庫を含む 体育館には駿河台 ホールの含む	
		14,903㎡	バレーコート, テニスコート, ゴルフ練習場, プール等						
経 費 積 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費の 見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次
		教員1人当り研究費等		1,850千円	1,902千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円
		共同研究費等		64,190千円	65,987千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円
		図書購入費	592千円	669千円	941千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円
	設備購入費	— 千円	2,762千円	4,406千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	
	学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
		820千円	540千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円		
学生納付金以外の維持方法の概要			補助金, 資産運用の果実及び寄付金その他収入をもって維持運営する						
既 設 大 学 等 の 状 況	大 学 の 名 称		明 治 大 学						
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所 在 地
	法学部	年	人	年次 人	人		倍		【法学部・商学 部・政治経済学 部・文学部・経営 学部・情報コミュニ ケーション学部】 (1～2年次) 東京都杉並区永福 1-9-1 (3～4年次) 東京都千代田区神 田駿河台1-1
	法律学科	4	900	—	3600	学士(法学)	1.02	昭和24年	
	商学部								
	商学科	4	1020	—	4080	学士(商学)	1.04	昭和24年	
	政治経済学部								
	政治学科	4	260	—	1040	学士(政治学)	1.05	昭和24年	
	経済学科	4	620	—	2480	学士(経済学)	1.14	昭和24年	
	地域行政学科	4	150	—	600	学士(地域行政学)	1.13	平成14年	
	文学部								
文学科	4	415	—	1660	学士(文学)	1.11	昭和24年		
史学地理学科	4	260	—	1040	学士(文学)	1.18	昭和24年		
心理社会学科	4	100	—	400	学士(文学)	1.24	平成14年		
経営学部									
経営学科	4	380	—	1520	学士(経営学)	1.11	昭和28年		
会計学科	4	170	—	680	学士(経営学)	1.06	平成14年		
公共経営学科	4	100	—	400	学士(経営学)	1.15	平成14年		

既設大学等	新領域創造専攻 博士前期課程	2	50	—	100	修士 (工学・理学・学術)	0.69	平成20年		
	博士後期課程	3	5	—	10	博士 (工学・理学・学術)	1.4	平成22年		
	先端数理科学研究科 先端数理科学専攻 博士前期課程	2	15	—	15	修士(数理科学)	0.66	平成23年		
	博士後期課程	3	5	—	5	博士(数理科学)	2.6	平成23年		
	農学研究科 農芸化学専攻 博士前期課程	2	26	—	52	修士(農学)	0.9	昭和34年		
	博士後期課程	3	2	—	6	博士(農学)	0.5	昭和53年		
	農学専攻 博士前期課程	2	20	—	40	修士(農学)	1.4	昭和53年		
	博士後期課程	3	2	—	6	博士(農学)	1	平成2年		
	農業経済学専攻 博士前期課程	2	8	—	16	修士(農学)	0.62	昭和53年		
	博士後期課程	3	2	—	6	博士(農学)	0.66	平成2年		
	生命科学専攻 博士前期課程	2	26	—	52	修士(農学)	1.22	平成15年		
	博士後期課程	3	2	—	6	博士(農学)	1	平成15年		
	大学の名称	明治大学大学院								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
		年	人	年次人	人		倍			
状況	法務研究科 法務専攻	3	170	—	540	法務博士(専門職)	1.18	平成16年	東京都千代田区神田駿河台1-1	
	ガバナンス研究科 ガバナンス専攻	2	—	—	—	修士(公共政策学)	—	平成16年		
	ガバナンス専攻	2	50	—	100	公共政策修士(専門職)	0.98	平成19年		
	グローバル・ビジネス研究科 グローバル・ビジネス専攻	2	80	—	160	経営管理修士(専門職)	1.01	平成16年		
	会計専門職研究科 会計専門職専攻	2	80	—	160	会計修士(専門職)	0.92	平成17年		
附属施設の概要	名称:研究・知財戦略機構 目的:本大学において世界的水準の研究を推進するため、重点領域を定めて研究拠点の育成を図り、研究の国際化を推進するとともに、その成果を広く社会に還元する 事業:①本大学における研究の戦略的推進 ②研究を戦略的に推進するための研究環境の重点的整備 ③研究資金確保のための活動 ④研究の国際化推進のための活動 ⑤研究面における社会との連携活動 ⑥知的財産の創出、取得、管理及び活用									
	名称:国際連携機構 目的:本大学における国際的な教育交流及び学術・研究交流を推進し、本大学の教育・研究分野の高度化を図るとともに、教育・研究を通じ広く国際貢献を果たす 事業:①国際連携の推進に係る基本戦略の策定 ②教育・研究を通じた国際貢献の推進									
	名称:図書館 目的:教育・研究の中核的機関として総合的な教養涵養及び専門的研究の積極的支援を担う 所在地:(中央図書館) 東京都千代田区神田駿河台1-1 (和泉図書館) 東京都杉並区永福1-9-1 (生田図書館) 神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1 規模:23,194㎡(蔵書約237万冊、新聞・雑誌約3万7千タイトル、マイクロ資料、CD-ROM等の資料を所蔵)									
	名称:博物館 目的:資料等の収集、整理、保存及び展示を行い、明治大学の学生、教職員、校友並びに一般公衆の利用に供し、教育・研究に資するための事業を行う 所在地:東京都千代田区神田駿河台1-1 アカデミーコモン地下1階 規模:商品部門、刑事部門、考古部門の3部門を持つ									

附属施設の概要	<p>名称：心理臨床センター 目的：臨床心理学的諸問題にかかわる相談・援助活動及び調査・研究を行うことにより、社会貢献を図るとともに、実習機関として臨床心理士の養成を行い、本大学の教育・研究に資する 所在地：東京都千代田区神田駿河台1-1 アカデミーコモン7階 設置年月日：平成16年4月 規模：246㎡（面接室3，遊戯療法室2，待合室2）</p>	
	<p>名称：工作工場 目的：理工学部（主に機械系）学生に、教科目として数種の簡単な機械要素製作を行わせることにより、工作機械における基本的な加工技術を取得させ、機械の設計・製作に関する全体的な理解を深めることを設置の目的としている 所在地：神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1 生田キャンパス内</p>	
	<p>名称：農場（菅田農場） 目的：農学部附属農場として、農場を擁し専任教職員により各専門分野の研究を行うと同時に農場実習・畜産実習等の実習教育に利用している 菅田農場 所在地：千葉県千葉市 規模：総面積26ha，農耕面積6ha，グラウンドと実習農場に利用されている 野菜・果樹等園芸作物の生産増に重点を置いている</p>	

教 育 課 程 等 の 概 要														
(国際日本学研究科 国際日本学専攻 (M))														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
主	視覚文化演習ⅠA	1前	2				○		1					
	視覚文化演習ⅠB	1後	2				○		1					
	視覚文化演習ⅠC	2前	2				○		1					
	視覚文化演習ⅠD	2後	2				○		1					
	視覚文化演習ⅡA	1前	2				○		1					
	視覚文化演習ⅡB	1後	2				○		1					
	視覚文化演習ⅡC	2前	2				○		1					
	視覚文化演習ⅡD	2後	2				○		1					
	ポップカルチャー演習ⅠA	1前	2				○			1				
	ポップカルチャー演習ⅠB	1後	2				○			1				
	ポップカルチャー演習ⅠC	2前	2				○			1				
	ポップカルチャー演習ⅠD	2後	2				○			1				
	ポップカルチャー演習ⅡA	1前	2				○			1				
	ポップカルチャー演習ⅡB	1後	2				○			1				
	ポップカルチャー演習ⅡC	2前	2				○			1				
	ポップカルチャー演習ⅡD	2後	2				○			1				
	ポップカルチャー演習ⅢA	1前	2				○			1				
	ポップカルチャー演習ⅢB	1後	2				○			1				
	ポップカルチャー演習ⅢC	2前	2				○			1				
	ポップカルチャー演習ⅢD	2後	2				○			1				
	コンテンツ・メディア演習ⅠA	1前	2				○		1					
	コンテンツ・メディア演習ⅠB	1後	2				○		1					
	コンテンツ・メディア演習ⅠC	2前	2				○		1					
	コンテンツ・メディア演習ⅠD	2後	2				○		1					
	コンテンツ・メディア演習ⅡA	1前	2				○		1					
	コンテンツ・メディア演習ⅡB	1後	2				○		1					
	コンテンツ・メディア演習ⅡC	2前	2				○		1					
	コンテンツ・メディア演習ⅡD	2後	2				○		1					
	日本社会システム演習ⅠA	1前	2				○		1					
	日本社会システム演習ⅠB	1後	2				○		1					
	日本社会システム演習ⅠC	2前	2				○		1					
	日本社会システム演習ⅠD	2後	2				○		1					
	日本社会システム演習ⅡA	1前	2				○			1				
	日本社会システム演習ⅡB	1後	2				○			1				
	日本社会システム演習ⅡC	2前	2				○			1				
	日本社会システム演習ⅡD	2後	2				○			1				
	多文化共生・異文化間教育演習ⅠA	1前	2				○		1					
	多文化共生・異文化間教育演習ⅠB	1後	2				○		1					
	多文化共生・異文化間教育演習ⅠC	2前	2				○		1					
	多文化共生・異文化間教育演習ⅠD	2後	2				○		1					
日本語学演習ⅠA	1前	2				○		1						
日本語学演習ⅠB	1後	2				○		1						
日本語学演習ⅠC	2前	2				○		1						
日本語学演習ⅠD	2後	2				○		1						
日本語教育学演習ⅠA	1前	2				○		1						
日本語教育学演習ⅠB	1後	2				○		1						
日本語教育学演習ⅠC	2前	2				○		1						
日本語教育学演習ⅠD	2後	2				○		1						
英語教育学演習ⅠA	1前	2				○		1						
英語教育学演習ⅠB	1後	2				○		1						
英語教育学演習ⅠC	2前	2				○		1						
英語教育学演習ⅠD	2後	2				○		1						
英語教育学演習ⅡA	1前	2				○		1						

共 研 通 研 科 目 間	国際系総合研究B	1前後		2		○									兼1	
	国際系総合研究C	1前後		2		○									兼1	
	国際系総合研究D	1前後		2		○									兼1	
	学際系総合研究D	1後		2		○									兼1	
	小計(7科目)	—	0	14	0	—			0	0	0	0	0	0	兼10	—
合計(118科目)		—	146	90	0	—			17	6	2	0	0	兼16	—	
学位又は称号		修士(国際日本学)		学位又は学科の分野			文学関係, 社会学・社会福祉関係									
修了要件及び履修方法							授業期間等									
1 本研究科の修士課程においては、30単位以上を修得しなければならない。 2 本研究科の主要科目の中から専修科目を選定し、その8単位を必修とする。 3 本研究科の主要科目(専修科目を除く。)及び特修科目の中から、国際日本学総合研究2単位及び指導教員が指定する講義2単位を含めて、12単位以上を修得しなければならない。 4 本研究科の授業科目のほか、他研究科(専門職学位課程を含む。)及び単位互換協定による他大学院の授業科目については、10単位を限度として修得することができる。 5 研究科間共通科目については、4単位を限度として修了に必要な単位数に含めることができる。 6 学位論文作成のため、指導教員による必要な研究指導を受けなければならない。							1学年の学期区分			2学期						
							1学期の授業期間			15週						
							1時限の授業時間			90分						

授 業 科 目 の 概 要			
(国際日本学研究科 国際日本学専攻(M))			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
主 要 科 目	視覚文化演習 I A	20世紀は特にその後半にかけて、久しく等閑視されてきた諸文化現象の発掘と再評価をめざして旧来の学問分野を越えるいわゆる脱領域・超分野の新しい学術が要請された。その花形分野たるマネリスム・バロック美学の研究を通して (1) 20世紀の新しい思想潮流を知り、 (2) 江戸時代から現代サブカルチャーまで貫く「日本的なもの」を西欧流の語彙で語ることでできれば目標は達成される。	
	視覚文化演習 I B	徐々に関心が高まりながら1980年代にたとえば「新美術史」と呼ばれる動きに代表されるような広義のvisualities研究が、「落ち目」の人文科学立て直しの救世主のように言われ、media criticism やbrain sciences と巧く連動して、今や「脱領域」した一新領域となりつつある。と思われているが、本当か。その新領域は何を対象とし、いかなる効果をもたらすか。核心的理論のめぼしいテキストを精読することで、「視覚文化論」という着眼の意義と魅力を知ってもらえれば目標は達成される。	
	視覚文化演習 I C	「視覚文化論」が現実においてどのような局面で効力を発揮するかを言語文化との係わりを通して実感してみる。一番分かり易いのはいわゆる「文学」との関連で、エクフレーシス (ekphrasis 画文共鳴・画文交響) 論の理論と実際を見ていきたい。整備された西欧のエクフレーシス論と実作に出合うことで本朝画文共鳴論への見通しが立ってくれば目標は達成される。	
	視覚文化演習 I D	20世紀一杯ゆっくり発展してきた、隣接諸学から実に多くのものを吸収し、まるで超領域学術の一典型のごとくになった現代の視覚文化論の奥の院とも呼べる界限で、次々新機軸をうみだすジェネレーターたちの仕事を追ってみる。当面は G・R・ホックと H・ブレードキャンプ (独語圏)、M・A・コーズと B・M・スタフォード (英語圏) の主要作品に知見を持ってれば目標は達成される。	
	視覚文化演習 II A	どのようなアプローチであろうとも映画文化について研究をおこなおうとするなら、まず過去にどのような研究がおこなわれてきたかに通じていなければならない。この授業では、基礎的な文献を講読し、修士課程に求められる知識を養い、映画についての研究史の概要を把握することを目指す。毎回、決められた担当者がテキストの要約を作成し、内容について発表する。他の受講者にも、担当者の発表をふまえて、活発に議論をおこなうことが求められる。	
	視覚文化演習 II B	映画文化の研究を充実させるためには、現在の世界の研究者たちがどのようなことをどのような角度から論じているか、という「研究の最前線」について知っておかなければならない。この授業では、そういった先端的な議論を詳細に検討し、最新の研究動向を把握することを目指す。その結果として各受講者が先端的な理論あるいはアプローチを真に身につけ、修士論文における自らの研究を、この分野の最前線に位置付けられるようなものとなすことが目標となる。	
	視覚文化演習 II C	各受講者は、過去に映画に関してどのような研究がおこなわれてきたかを十分に把握した上で、自らの関心に即したテーマ (映画ジャンル、映画作家等) について発表をおこない、そのあとで受講者全員で討論をおこなう。その過程を通じて、各受講者は自らの修士論文でとり扱うテーマ、内容、手法の概要を確定し、これについても受講者全員で討論する。それによって、修士論文における自らの研究を最高水準のものとする準備を万全なものとする。	
	視覚文化演習 II D	各受講者は、すでに自分の扱うテーマ、アプローチ、手法が確定しているはずであるので、それに基づいて、それぞれがそこまでの研究成果の発表をおこなう。続いて全員でそれに対する検討を行う。これを通じて、修士論文の完成に向けて、自らの研究の問題点を把握し、その改善、調整を行えるようにする。またそれ以外にも、適宜参考文献などを指示し、それについての検討もおこなう。必要な場合には、DVD等を視聴しながら、映画作品あるいは監督、ジャンル等の研究を深める。	
	ポップカルチャー演習 I A	漫画「表現」とはどのような特徴を持ち、これまでの日本ではどのような言説があり、何が問題の遡上にあがっているのか。伊藤剛『テヅカ・イズ・デッド』と、それが踏まえている文献を通して精読することで、漫画論の蓄積と状況の変化、問題意識の射程の基本を押さえる。	
	ポップカルチャー演習 I B	この授業では、主に欧米の著者による代表的な漫画表現論の著作を精読する。具体的には、アメリカのウィル・アイズナーの古典“Comics & Sequential Art”，同じくアメリカはスコット・マクラウドの“UNDERSTANDING COMICS”，フランスを代表するティエリ・グルンステン“Systeme de la Bande Dessinée” (邦訳「マンガのシステム」) の記述について、日本マンガにもあてはまるかどうかも含め、討議しながら原著を読み解いていく。フランス語であるグルンステン氏の著書をのぞき、英語の原著を使用する。	

要	ポップカルチャー演習 I C	基本的なマンガ論の蓄積を踏まえ、ヨーロッパ・アメリカ・アジア、また国により異なるマンガ状況、マンガ表現のあり方について具体的な国ごとに検討していく。世界のマンガ状況の共通性と変異の現時点での見取り図を頭に入れることを目的とする。	
	ポップカルチャー演習 I D	「少年愛」「やおい」「BL」と呼ばれる、「男どうしの性愛」を扱った女性向けのマンガ・小説のジャンルは、日本で独特の発達を遂げ、いまや世界中に広がりつつある。論考もさまざまになされているが、いまだその整理は行われていない状態である。この演習では、「やおい・BL」をテーマに書かれた主だった論考を通読し、差異をあきらかにして整理することを試みる。	
	ポップカルチャー演習 II A	ポップカルチャー演習II A-Dでは、マンガ・アニメ・ゲームなどの現代文化、キャラクター商品、現代美術やデザイン、そして現代都市に関するさまざまな現象を扱う。とりわけ「おたく文化」やその秋葉原への集中に見受けられるような、特定のスタイルやテイスト、コミュニティや場の形成を追う研究に、アクセントを置く。自分でマンガ作品や小説、自主製作アニメーション等の「作品」を制作・公表し、その成果をまとめるような研究も受け入れる。また、英語による発表や論文も可とする。 演習II Aでは、基礎的な文献の精読や既往研究を洗い出しつつ、発表とディスカッションを繰り返しながら、各々の関心に沿った研究テーマ設定を進める。古典的文献としてマクルーハンの『メディア論』を精読しつつ、マンガ・アニメ・ゲームの重要作品を紹介・鑑賞する機会を設ける。	
	ポップカルチャー演習 II B	演習II Aが文献調査に力点を置いたのに対し、演習II Bでは、各々の研究テーマにより、フィールドワークやインタビューなどの取材調査を行う。作品制作を行う者は、対象とする受容層に対するリサーチを行う。年度末にはそれらの成果を製本された状態、またはパッケージされたプレゼンテーションにまとめる。就職を希望する業種によっては、就職活動のポートフォリオの一部となるように作成してもよい。また適宜、受講者の関心や傾向に応じ、展覧会や見本市、街を視察する学外演習を実施する。 古典的論文としてベンヤミンの「複製技術時代の芸術作品」を精読しつつ、引き続きマンガ・アニメ・ゲームの重要作品を紹介・鑑賞する機会を設ける。	
	ポップカルチャー演習 II C	ポップカルチャー演習II C・Dでは、演習II A・Bでまとめた成果と経験を下敷きにしなが、研究計画を再構築し、学外の場で発表することを想定した修士論文/修士作品の作成に焦点を合わせる。とりわけマンガ・アニメ・ゲームおよびそれらに近接する文化は、学問や教養の対象として新しいため、テーマ設定や資料の採取、調査法や発表手法の創出に多くの試行錯誤や実験を要する。前衛的な試みを促したい。 演習II Cでは、逐次成果報告を行いながら、一次資料の採取を進める。加えて、過去からの経緯の上に対象を位置づけたり、対象の歴史的な成り立ちを明らかにしていく。 古典的文献としてブルデューの『ディスタンクシオン』を精読しつつ、引き続きマンガ・アニメ・ゲームの重要作品を紹介・鑑賞する機会を設ける。	
	ポップカルチャー演習 II D	論文/作品の執筆や制作に重心を移す。併行して、章立てや装幀、ウェブ配信といった、プレゼンテーションの手法を、先行する事例などを参照しながら学ぶ。年度末には演習II A～Dの成果を、修士論文/修士作品として、製本された状態、またはパッケージされたプレゼンテーションにまとめ、それぞれのテーマに応じた場で公表する。 古典的論文としてグリーンバーグの「アヴァンギャルドとキッチュ」を精読しつつ、引き続きマンガ・アニメ・ゲームの重要作品を紹介・鑑賞する機会を設ける。	
	ポップカルチャー演習 III A	漫画、およびアニメーションを考える上で必要な基礎文献の講読を通じて、修士課程において必要な読解力を養うことと、漫画・アニメーションについての研究・評論史の概要を把握することを目指す。具体的には、毎回担当を決め、当該テキストの詳細なレジュメを作成した上で、内容の要旨を発表する。他の受講者には、発表者の要約を踏まえて、活発に質疑を行うことを求める。	
目	ポップカルチャー演習 III B	漫画、およびアニメーションの研究・評論上の、先端的な議論を重点的に検討することを通じて、最新の研究動向を把握し、その意義と問題点を自分なりに要約できる力を身につけることを目指す。また、これを通じて、修士論文における自らの研究を、この分野の最前線に位置付けられるようになることを目指す。	
	ポップカルチャー演習 III C	漫画・アニメーションに関する先行研究の批判的検討に基づいて、自らの研究の内容と意義をプレゼンテーションする訓練を行う。具体的には、受講者各自が、まず、自らの関心に即した文献を要約、発表し、これについて受講者全員で討論を行う。その上で、受講者各自が、自らの修士論文のテーマ、内容、手法の概要を発表し、これについて受講者全員で討論する。これを通じて、修士論文における自らの研究を、この分野の最前線に位置付ける力を高めることを目指す。	
主	ポップカルチャー演習 III C		

要	ポップカルチャー演習 III D	漫画・アニメーションに関する受講者各自の研究の発表と、それに対する検討を行う。具体的には、受講者各自が、まず、自らの修士論文のための研究の内容について発表し、これについて受講者全員で討論を行う。これを通じて、修士論文の完成に向けて、自らの研究の問題点を把握し、その改善、調整を行えるようにする。	
	コンテンツ・メディア演習 I A	新聞、ラジオ、テレビ、インターネットなどメディアが多様化する中で、ニュース報道の在り方、ジャーナリストの仕事の在り方について具体例を取り上げながら検証する。演習の狙いは、受講者が現代ジャーナリズムの構造と問題点を理解・研究することにある。	
	コンテンツ・メディア演習 I B	新聞、ラジオ、テレビ、インターネットなどメディアが多様化する中で、ニュース報道のコンテンツや手法に関しての評価が揺らいでいる。報道不信の構造はいったいどのようにして生まれてきたのか。信頼を回復する手立てはあるのかを、具体例を取り上げながら検証する。演習の狙いは、受講者が報道不信の構造に潜む現代ジャーナリズムの問題点を理解・研究することにある。	
	コンテンツ・メディア演習 I C	新聞、ラジオ、テレビ、インターネットなどメディアの影響力が拡大していく中、メディアの権力性が高まっている。司法、立法、行政に加えてメディアは第4の権力と呼ばれるようにもなった。この授業では具体例を取り上げながらメディアの権力性の背景やこれからを検証する。演習の狙いは、受講者がメディアの権力性に関しての問題点を理解し研究することにある。	
	コンテンツ・メディア演習 I D	新聞、ラジオ、テレビ、インターネットなどメディアが多様化する中、ニュース報道のコンテンツや手法も変化してきているが、今後のジャーナリズムにどのような可能性があるのかを考察する。様々な分野で具体例を取り上げながら検証する。演習の狙いは、受講者がジャーナリズムとジャーナリストに関しての深い見識を身につけるとともに現代のジャーナリズム再生に何が必要なのかを理解・研究することにある。	
	コンテンツ・メディア演習 II A	放送業界や出版業界などの既存メディアは情報通信技術の進歩により、コンテンツの生成プロセス、流通方法、消費されていく形態が急速に変化しようとしている。メディアとコンテンツが分離されつつある状況において、それが既存のメディアにどのような影響を及ぼしていくのか、具体的な企業をケーススタディとして取り上げながら、コンテンツ、メディアの置かれている状況を具体的に考察する。	
	コンテンツ・メディア演習 II B	電子書籍や映像配信事業に見られるように、コンテンツとメディアが分離することにより、これまでにないさまざまなビジネスモデル、産業モデルが考えられている。近年、特にユーザーの経済心理行動をも加味し、フリーの概念を多面的にモディファイしたビジネスモデルが台頭している。これらの背景には急速に進展するICT技術が多大な影響を及ぼしている。最新の技術動向を踏まえ、既存のモデルを分析しつつ、新たなメディアとコンテンツの連携ビジネスモデルを検討する。	
	コンテンツ・メディア演習 II C	日本のコンテンツ産業の現状と課題について多面的に考察する。日本の製造業に陰りが見える中、コンテンツ産業に対する期待は高いが、必ずしも高い成長が実現できるとは限らない。コンテンツ産業の大きな特色であるマルチユースによる関連部門への波及効果を高めることは一層必要になる。観光など地域への波及効果も今後重要になる。どこに課題があり、どのように克服すべきかを把握し、他産業と比較しつつコンテンツ産業の活性化を検討する。	
	コンテンツ・メディア演習 II D	ゲームやアニメを始め、日本のコンテンツは世界的に人気が高いが、必ずしも産業規模でみると高いとはいえない。相手国とは商習慣や法規制が異なり、優れたコンテンツさえ制作すればよいというものではない。日本のコンテンツ産業を名実ともにグローバル化するには、どのような戦略が必要なのだろうか。韓国、中国を始めとする海外の動向を踏まえ、国際競争力を高めていくための戦略を産業政策の視点から総合的に捉えてみる。	
	コンテンツ・メディア演習 II E	グローバル化時代の地域経済のあり方を検討する。そのためにまず日本経済の強さをもたらす一要素となっている産業集積（クラスター）に着目し、先行研究が提示している産地型・大都市型・企業城下町型等の諸類型の特徴を事例に即して歴史的に解明する。さらに、それぞれの産業集積のダイナミズムを明らかにするために、当該産業集積をその発展のボトルネックになりがちな流通・マーケティング展開に着目して分析し、それぞれの類型ごとの相違点と問題点を検討する。	
目	日本社会システム演習 I A		
主	日本社会システム演習 I B	グローバル化時代の地域経済のあり方を産業集積（クラスター）に着目して検討する。ここでは産業集積の3類型の個別事例を深く掘り下げて検討する。その際、地場産業など多数の中小企業を含んだ産業集積としての柔軟性・合理性、さらには発展・成長のボトルネックとなりがちな流通・マーケティング問題に着目して検討する。また、産業集積に多大な影響を及ぼす産業政策・地域政策も分析対象とする。これらの検討を通じて、産業クラスターの可能性に関する理解を深めることを到達目標とする。	

要	日本社会システム演習 I C	グローバル化時代の地域経済のあり方を研究するもうひとつの分野として、まちづくりと流通問題を検討する。近年、まちづくり3法に示されているように小売業をまちづくりのインフラのひとつに位置づけ、中心市街地の活性化が試みられている。ここでは流通に関する全国的動向及び流通政策の推移を検討することにより、まちづくりの視点からの大店立地法下の流通政策及び地域流通における日本の特質を理解することを到達目標とする。	
	日本社会システム演習 I D	グローバル化時代の地域経済のあり方を、まちづくりと流通問題という視点から検討する。ここでは、まちづくり3法（大店立地法・改正都市計画法・中心市街地活性化法）の下でのまちづくりや地域経済の活性化を試みている事例に関するフィールドワークを通して、日本における流通のあり方を検討する。これらの検討により、まちづくりの視点からの大店立地法下の流通政策及び地域流通における日本の特質を理解することを到達目標とする。	
	日本社会システム演習 II A	日本企業の人事労務管理に関しては、長期雇用や年功賃金が今の時代に果たして有効的な制度なのかなど、さまざまな論点がある。この演習では、日本企業の生産現場の強さの要因とされる「知的熟練」をはじめ、労働者やホワイトカラーのキャリア管理、年功賃金や長期雇用などの主要問題を取り上げ、日本企業の国際展開の視点も入れて、議論する。それに合わせて、中小企業労働者や女性労働者や高年労働者などの分野にも目を配り、そこにどのような問題があり、その課題は何かについても考える。	
	日本社会システム演習 II B	日本企業の海外工場におけるものづくり方式の移転と人材育成をテーマとする。その前提として日本企業の海外展開の歴史、直接投資の推移、海外日本企業についての既存研究を外観し、その後、欧州とアジアの日本企業の海外工場の事例を取り上げ、日本企業の競争優位の要素を海外工場に移転するとき、どのような要因が決め手になるかについて考える。	
	日本社会システム演習 II C	ものづくりの組織能力は国・地域によって偏在している。すなわち、特定の国・地域がすべての分野で競争優位を發揮する例はあまりない。日本の場合も例外ではなく、日本企業の得意と不得意の分野が存在する。この演習ではこの問題を、製品アーキテクチャの概念に基づいて、アジア地域を中心にして考える。	
	日本社会システム演習 II D	「強い工場」と「弱い本社」、「高いものづくり組織能力」と「低い市場パフォーマンス」という日本企業の問題について、ものづくり組織能力と製品アーキテクチャを軸に考える。それにあわせて、代表的な新興国としての中国との関係設定についても議論する。	
科	多文化共生・異文化間教育演習 I A	この演習は、何らかの形で留学生にかかわる留学生担当者／研究者を育成することを目的とする。すなわち、大学等の機関の教職員、地域国際化のコーディネーター、あるいは日本語教師などを目指す者が、留学生政策や留学生アドバイジングの知識とスキルを身につけるといった目的で履修することを想定している。授業時間では、文献購読とディスカッション、調査と発表という形式をとるが、担当者育成をその目的に据えているので、ここでいう調査とは、実践に基づく観察やヒアリング等も含むものである。 I Aでは、留学生(あるいはより広く教育の国際化に関する異文化間教育)に関するこれまでの先行研究について、毎回、担当する受講者が当該テキストの詳細なレジュメを作成して要旨を発表し、他の受講者との活発な質疑応答を行う。これによって、留学生(異文化間教育)に関する全体像を把握し、修士課程で必要な読解力と発表力を鍛える。	
	多文化共生・異文化間教育演習 I B	この演習は、何らかの形で留学生にかかわる留学生担当者／研究者を育成することを目的とする。すなわち、大学等の機関の教職員、地域国際化のコーディネーター、あるいは日本語教師などを目指す者が、留学生政策や留学生アドバイジングの知識とスキルを身につけるといった目的で履修することを想定している。授業時間では、文献購読とディスカッション、調査と発表という形式をとるが、担当者育成をその目的に据えているので、ここでいう調査とは、実践に基づく観察やヒアリング等も含むものである。 I Bでは、個人の演習テーマ(修士論文につながるテーマ)を決めて、そのテーマに関する文献を読み進むとともに、具体的な調査を設計し、後半ではその計画に則り調査(文献研究を含む)を開始する。2月には、異文化間教育学会大会(6月)の発表申請(ポスター発表等)を行い、3月に大会発表抄録のための原稿を提出する。これを通して、受講者の関心を調査と学会発表という具体的な成果に結実させる力量を鍛える。	
目			

主	多文化共生・異文化間教育演習 I C	<p>この演習は、何らかの形で留学生にかかわる留学生担当者／研究者を育成することを目的とする。すなわち、大学等の機関の教職員、地域国際化のコーディネーター、あるいは日本語教師などを目指す者が、留学生政策や留学生アドバイジングの知識とスキルを身につけるという目的で履修することを想定している。授業時間では、文献購読とディスカッション、調査と発表という形式をとるが、担当者育成をその目的に据えているので、ここでいう調査とは、実践に基づく観察やヒアリング等も含むものである。</p> <p>I Cでは、個人の演習テーマ(修士論文につながるテーマ)に関する文献を読み進むとともに、6月に開催される異文化間教育学会大会において発表するための模範発表を行う。</p> <p>これを通して、修士論文の中核となる調査とその理論的な筋立てを明確に表現する力量、ならびにパワーポイントをういた発表力を鍛える。</p>	
	多文化共生・異文化間教育演習 I D	<p>この演習は、何らかの形で留学生にかかわる留学生担当者／研究者を育成することを目的とする。すなわち、大学等の機関の教職員、地域国際化のコーディネーター、あるいは日本語教師などを目指す者が、留学生政策や留学生アドバイジングの知識とスキルを身につけるという目的で履修することを想定している。授業時間では、文献購読とディスカッション、調査と発表という形式をとるが、担当者育成をその目的に据えているので、ここでいう調査とは、実践に基づく観察やヒアリング等も含むものである。</p> <p>I Dでは、6月の異文化間教育学会大会における個人発表ならびに夏期休業期間中の追加調査に基づき、修士論文の最終的な構成を発表し、完成させる。</p>	
要	日本語学演習 I A	<p>日本語学の諸分野のうち、語彙に焦点を絞った研究を行います。語彙の中でも、日本語の特色になっている擬音語・擬態語の歴史的研究を推し進める能力と技術を身に付けることを目的とする。</p> <p>この I Aの演習では、①現代語の擬音語・擬態語とはどんなものか、②書き記された資料の残る奈良時代の擬音語・擬態語を調査し、どんな特色があるか、③現代語のそれとどう違うかを明らかにすることが、到達目標である。</p>	
	日本語学演習 I B	<p>日本語学の諸分野のうち、語彙に焦点を絞った研究を行う。</p> <p>語彙の中でも、日本語の特色になっている擬音語・擬態語の歴史的研究を推し進める能力と技術を身に付けることを目的とする。</p> <p>この I Bの演習では、①平安時代の擬音語・擬態語を調査し、どんな特色があるか、②現代語のそれと比較すると、どう違うか、③奈良時代のそれと比較すると、どう違うかを明らかにすることが到達目標である。</p>	
	日本語学演習 I C	<p>日本語学の諸分野のうち、語彙に焦点を絞った研究を行います。</p> <p>語彙の中でも、日本語の特色になっている擬音語・擬態語の歴史的研究を推し進める能力と技術を身に付けることを目的とする。</p> <p>この I Cの演習では、①鎌倉時代と室町時代の擬音語・擬態語を調査し、どんな特色があるか、②現代語のそれと比較するとどう違うか、③奈良時代や平安時代のそれと比較すると、どう違うかを明らかにすることが到達目標である。</p>	
	日本語学演習 I D	<p>日本語学の諸分野のうち、語彙に焦点を絞った研究を行う。</p> <p>語彙の中でも、日本語の特色になっている擬音語・擬態語の歴史的研究を推し進めることを到達目標とする。</p> <p>この I Dの演習では、①江戸時代の擬音語・擬態語を調査し、どんな特質があるか、②現代語のそれと比較すると、どう違うか、③奈良時代や平安時代や鎌倉室町時代のそれと比較すると、どう違うかを明らかにすることが到達目標である。</p>	
科	日本語教育学演習 I A	<p>どの言語文化においても、言語によるコミュニケーションでは、情報伝達だけでなく人間関係への配慮が常に行われている。日本語は、高度に発達した敬語体系を持っているが、敬語だけが対人配慮を担っているわけではない。適切な配慮を欠いた表現は、相互理解の妨げになる可能性も高いため、配慮表現は日本語教育においても重要な項目と言ってよい。この授業では、日本語の敬語体系に加えて、「決定権」「利益」「縄張り」などの観点からより幅広く配慮表現を捉え、その原理を考察する。</p>	
	日本語教育学演習 I B	<p>人間の言語を語用論的に考える際に、人間関係を円滑なものに維持するための「ポライトネス」という概念は広く受け入れられている。この授業では、Brown&LevinsonおよびLeechによる「ポライトネス」の概念を概観し、フェイス、ポライトネス・ストラテジー、発話内行為の機能・社会的目標と丁寧さの関連等を考察する。また、「ポライトネス理論」への批判を踏まえて、この理論が敬語体系を持つ日本語の言語運用にもそのまま当てはまるのかを検討する。</p>	
	日本語教育学演習 I C	<p>授受動詞は、単なる語彙項目ではなく、広範な文法現象と関わって日本語における物事の捉え方を端的に示すと同時に、運用面においても配慮的表現に不可欠なものである。この授業では、授受動詞を日本語教育文法の観点から考察し、日本語教育においてどのように扱うべきかを検討する。類似・対立する形式との差は何かという意味・用法のレベル、文単位にとどまらない談話・テキストのレベル、さらには実際の運用にかかわる社会語用論的レベルにわたって、授受動詞を用いた述べて文・疑問文を分析する。</p>	
目			

主	日本語教育学演習 I D	日本語の授受動詞は、ベネファクティブと呼ばれる補助動詞としての用法を持つ。この形式は、特に依頼表現に不可欠であり、逆に自らの行為を申し出る際に用いると語用論的に問題を引き起こす可能性が高いなど、日本語教育で検討すべき課題は多い。この授業では、働きかけ文・表出文において授受動詞がどのように用いられるのか、また用いられないのか、用いられる際には発話内行為によって諸形式がどのように使い分けられるのかを観察し、その背後にある原理を分析する。	
	英語教育学演習 I A	教師主導、文法中心の英語教育に代わるものとして、1980年代に登場したtask-based instruction（タスクを取り入れた指導法）は、第2言語習得理論においても、カリキュラム開発においても、テスト分野においても普及しつつある。日本の初等中等英語教育では、授業においてタスクが使われることはあるが、そのほとんどは、指導の最後におまけのように使われることが多く、指導の中心として使われることは少ない。本演習では、言語使用の目的を作り、言語学習に有益で自然な環境を作り出すTBIをまず指導の中心に置いた授業を実現できるように考察する。	
	英語教育学演習 I B	母語習得においては、ほぼ全員が一定のレベルの習熟度に達するのにもかかわらず、第2言語習得においては、ほとんど第2言語を習得できずに終わる学習者から母語話者の習熟度近くまで習得できる学習者が存在する。その原因は個人差要因にあると言われている。個人差要因は、学習者が第2言語をどの程度習得できるかを予想できる最も強力な要因であるというのが最近の第2言語習得理論の説である。この演習では、第2言語習得において、personality, aptitude, motivation, cognitive styles, learning strategiesなどの個人差要因が果たす役割を探求する。	
	英語教育学演習 I C	学習ストラテジーとは、新しい情報を理解し、学習し、記憶するために個人が使用する思考プロセスもしくは、行動であると一般的に定義されている。近年、この学習ストラテジーの定義そのものを疑問視する研究者も現れている。しかし、学習ストラテジーの中で、学習の目標を設定し、計画を立て、問題があれば問題を解決し、学習結果を自己評価するメタ認知ストラテジーの重要性は、自律した学習者を育てるために必要不可欠なストラテジーである。授業では、学習ストラテジーを理解し、学習ストラテジー指導を取り入れた英語教育をどのように実施していくかについて研究する。	
	英語教育学演習 I D	日本の教育課程の根幹を定める学校教育法が平成19年に一部改正され、初めて「生涯学習」を推奨する項目が小学校第三十条に入った。そこには、「前項においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意をもちいなければならない」と書かれている。この教育法の一文は、まさに自律した学習者とは何か、どうして自律した学習者を育てていくにはいかに的確に表している。本演習では、自律した学習者とは何かを解明し、どのようにして学習者の自律性を育てればよいかについて考察する。	
科	英語教育学演習 II A	本演習のテーマは「Cross-cultural pragmatics」である。Pragmatics（語用論）は、ことばの「言語使用の中での意味」や「文脈の中での意味」を研究対象とする学問だが、本授業では異文化間の語用比較に重点を置く。授業の流れとしては、まず語用論を理解する上で重要な理論を概観し、つづいて、比較文化語用論や異文化間語用論について、事例研究や実証研究の論文を読みながら理解を深めていく。最終的には、受講生が自分で選択した研究論文について発表をおこなう。	
	英語教育学演習 II B	本授業は、主に日本人の英語学習者を対象とした中間言語語用論研究をテーマとする。依頼、謝罪、断り、不満表明、賞賛、感謝などのスピーチアクトを英語でおこなう場合、日本人学習者は母語話者とどのような相違点や共通点を示すのだろうか。また相違はどのような要因によるものだろうか。本授業では、それぞれのスピーチアクトについて代表的な先行研究を比較検討しながら、理解を深めていきたい。最終的には受講生が選択した研究論文について発表をおこなう。	
	英語教育学演習 II C	本授業では、中間言語語用論の研究の中でも、第2言語学習者の語用論的能力がどのように発達するかについての研究を中心テーマとする。語用論的能力の発達研究はどのような観点からおこなわれてきたのか、データ収集はどのようにしておこなうのか、どのように分析するのか、等について様々な研究論文を实际に読みながら理解を深める。最終的には、受講生自身がリサーチ・デザインを作成し発表する。	
目	英語教育学演習 II D	本授業のテーマは語用論の指導である。国際化が進み、異文化コミュニケーションが身近となった現代においては、英語学習者にとって、文法能力ばかりではなく、場面に即して適切な言い方ができる語用論的能力を身につけることが重要である。英語教育の立場からは、語用論的能力を伸ばすための指導はどのようにおこなえばいいのだろうか。本授業では、語用指導の理論的側面から、実践的な教室での指導方法に至るまで、幅広く取り上げていく。最終的には、受講生が語用指導を取り入れた指導案を作成し、模擬授業をおこなう。	

主	英語教育学演習ⅢA	<p>(英文) The seminar provides an introduction to discourse analysis, that is, how language is organized and the structural aspects of discourse. Students will be able to identify the structural features of various genres. This knowledge will be particularly useful in the teaching of listening and reading comprehension, as well as writing.</p> <p>(和訳) この授業では、談話分析について、具体的には言語を構成する方法と談話の構造について取り扱う。この授業をとおして、受講者が様々なジャンルの談話について構造の特徴を見出すことができるようになることを目標としている。この知識は、ライティング同様、聴解、読解を教える上で特に役立つと考えられる。</p>	
要	英語教育学演習ⅢB	<p>(英文) The seminar further examines discourse analysis, that is, how language is used and how users make sense of language. The ways in which language, either spoken or written, are organized into texts reflect the social context of language use. Texts can bring about changes such as in beliefs and attitudes and so text analysis cannot be seen as separate from social analysis. Yet texts are not necessarily transparent, thus emphasizing the importance of an understanding of discourse analysis for educators. This will assist them in training their students in critical thinking.</p> <p>(和訳) この授業では談話分析をさらに考察し、どのように言語が使用され、どのように言語が理解されるかについて取り扱う。話されている、あるいは記述されている言語が文章に構成される方法は、言語を使用する社会的背景に関係する。また文章は宗教的な信条や心構えも関係する。そのため、文章の分析は社会分析から切り離して考えることができない。文章は必ずしも明白ではないために、教育者にとっては談話分析の理解が重要になる。これは批評的思考法を学生に身につさせる上で教育者にとって必要な知識となると考えられる。</p>	
科	英語教育学演習ⅢC	<p>(英文) The seminar focuses on how language interacts with the media. Drawing on theories of discourse, the ways language are employed in different media, that is, the types of words used and the patterns of organization, will be analyzed. As media communication has changed, so too have the ways language is used. An examination of different media genres and styles can lead to a clearer understanding of the nature of media discourse. Such an understanding can provide educators with a deeper awareness of the relationship between language and the media and their role in contemporary society.</p> <p>(和訳) この授業では、どのように言語がメディアに影響されるかを考察する。談話の理論を用いながら、言語が様々なメディアにおいて用いられる方法、つまり使用される言葉の種類、構造パターンを分析します。メディアの情報伝達方法が変化してきたのと同時に、言語が使用される方法もまた変化してきた。様々なメディアのジャンルやスタイルの調査が、メディアにおける談話のあり方をより明確に理解することにつながる。これを理解することにより、教育者は言語とメディアの関係と、現代社会におけるこれらの役割をより深く自覚することになる。</p>	
目	英語教育学演習ⅢD	<p>(英文) The seminar focuses on the ways language are used in the media to convey information. This can mean not only choosing the appropriate words, but also images, music, and sound to create multimodal discourses. As the ways of using language in the media have changed, so too have the social contexts. These changes in communication raise implications for the role of educators, the classroom, and the meaning of literacy.</p> <p>(和訳) この授業では、情報を伝達するためにメディアにおいて言語が使用される方法を考察する。これは適切な言葉を選択するだけでなく、マルチモーダルな談話を創造するためのイメージ、音楽、音声を選択することも意味する。メディアの世界で言語を使用する方法が変化しているのと同時に、社会的背景もまた変化してきた。情報伝達におけるこれらの変化は、教育者の役割、学級、そしてリテラシーの手段に影響を与える。</p>	

主	文化関係・文化変容演習 I A	比較文学比較文化の基礎資料の講読とディスカッションを通して、比較文学比較文化研究の基本理念と研究方法を身につけ、修士論文を作成する上で必要な知識とスキルを身につける。講読する資料は比較文学比較文化の基本理論に関するものを中心とする。とくに以下の内容に重点を置きたい。一つは比較文学が学問として成立する背景とその方法論、二つ目は比較文化研究としての比較文学、三つ目は近代日本における独特な展開である。また、エドワード・W.サイードやG.C.スビヴァクなど、近年、海外の学界で発表された主要な論文や著書も取り上げる予定である。	
	文化関係・文化変容演習 I B	文化関係・文化変容研究演習 I A を履修した者を対象とする授業で、引き続き比較文学比較文化の基礎資料の講読と討議を行う。比較文学比較文化の基礎資料の講読とディスカッションを通して、比較文学比較文化研究の基本理念と研究方法を身につける。講読する資料は比較文学比較文化の基本理論に関するものを中心に、具体的な研究例について検討し、討議を行う。授業の後半には演習の履修者に発表が求められる。	
	文化関係・文化変容演習 I C	この演習は発表を中心に行われる。履修者は比較文学比較文化と関連のあるテーマのうち、自分が関心を持つ問題を取り上げ発表し、演習参加者はディスカッションを行う。議論を通して、自らが選んだ研究テーマについての理解を深め、また、資料調査の進み方や、論証の方法の問題点を見つけて改善することができる。取り上げるテーマは比較文学比較文化のうち、とくに近代における異文化受容を中心とする。具体的なテーマは近代日本における西洋文学・西洋文化の受容でいいし、あるいは外国における日本文学・日本文化の受容でもいい。発表は修士論文と関連がある。	
	文化関係・文化変容演習 I D	修士論文の作成に関連する演習科目である。授業は研究資料の講読と発表の二本立てで構成され、一週ごとに参加者による発表を行う。発表では修士論文と関連のあるテーマを取り上げるのが望ましい。講読のリストは事前に履修生に知らせ、予習してから授業に臨んでほしい。発表内容については、授業担当者と事前に相談することが求められる。講読する資料は英語と中国と日本語のものが用いられるから、それぞれの語学には上級相当の読解力が求められる。	
	文化関係・文化変容演習 II A	本地物研究をテーマに、中世神話ともいわれる御伽草子の一ジャンルである本地物作品を毎回レポーターを立てて輪読していく。具体的には「熊野の本地」を諸伝本を比較しながら一言一句に拘って精読する。作品の精読を通して、中世における日本人の神観念や信仰実態の一端を窺い知ること、あわせて、中世文学作品の扱い方の基礎を学んでもらうことを到達目標とする。	
	文化関係・文化変容演習 II B	「民衆宗教絵画に見る日本人の伝統的生死観」をテーマに、地獄絵・六道絵・十王図・地獄極楽絵・熊野観心十界曼荼羅・立山曼荼羅などの中近世の冥界を描いた各種の民衆宗教絵画の図像分析を通して、日本人の伝統的冥界観・生死観を探る。『往生要集』や冥界遍歴物語などの文献資料も援用しながら、現在急速に失われつつある日本人の伝統的冥界観・生死観・靈魂観を具体的に把握し、その文化的・歴史的意味などを考察してもらうことを到達目標とする。	
	文化関係・文化変容演習 II C	「近世日本におけるイソップ寓話の受容と変容」をテーマに、仮名草子『伊曾保物語』を影印版を使って毎回レポーターを立てて輪読していく。イエズス会によって日本にもたらされ邦訳されたイソップ寓話に端を発する仮名草子『伊曾保物語』をヨーロッパのイソップ寓話や天草版『イソポのハブラス』などの関連文献資料を参照しながら精読していくことで、イソップ寓話の日本における受容と変容の様を具体的に把握し、その文化的・歴史的意味などを考察してもらうこと、また、あわせて変体仮名の読解力を身につけてもらうことを到達目標とする。	
	文化関係・文化変容演習 II D	「日本の地藏信仰の世界」をテーマに、古代・中世の地藏説話を集成して近世前期に刊行された地藏説話集『一四巻本 地藏菩薩靈験記』を毎回レポーターを立てて輪読していく。同源的同話や類話などの関連資料を比較などを通して活用し、先行研究にも導かれながら一話ずつ精読していくことで、古代・中世の地藏信仰の実態やその変容について具体的に把握し、その文化的・歴史的意味などについて考察してもらうことを到達目標とする。	
	日本思想演習 I A	明治時代以降の日本の思想を考察する際には、それに影響を与えたさまざまな思想伝統の意義を十分に認識しておくことがとりわけ重要である。この授業では、「自己」に焦点をあて、フィヒテの『全知識学の基礎』（1794/95）を読む。『全知識学の基礎』は、「自己」について考える際の古典的著作であるとともに、近代の日本思想に大きな影響を与えた著作でもある。	
日本思想演習 I B	西田幾多郎の論文「場所的論理と宗教的世界観」（1945）を読む。この最晩年の宗教論において西田は、「自己」とは何かを独自の仕方ですべて徹底的に究明している。		
要			
科			
目			

主 要 科 目	日本思想演習 I C	明治時代以降の日本の思想を考察する際には、それに影響を与えたさまざまな思想伝統の意義を十分に認識しておくことがとりわけ重要である。この授業では、「自己」に焦点をあて、キェルケゴールの『死にいたる病』を読む。『死にいたる病』は、「自己」について考える際の古典的著作であるとともに、近代の日本思想に大きな影響を与えた著作でもある。	
	日本思想演習 I D	西谷啓治の『宗教とは何か』（1961）を読む。この西谷の主著は、日本人哲学者の著作としては国外で最もよく読まれているものの一つである。西谷はそこにおいて「空」を根本概念として自らの思想を展開しているが、この授業では、「空」の場における自己とはどのようなものであるのかを明らかにしたいと考えている。	
特 修 科 目	国際日本学総合研究	<p>本講義科目は、本研究科の基本コンセプトに関する共通認識を形成する目的で設置されている。その要点として、1. 日本研究と国際研究の統一的把握の意義、2. 日本文化研究と日本社会システム研究の相互浸透性の理解、3. 諸外国における日本学と日本国内における日本研究の交流・融合促進、が挙げられる。そのために、視覚文化、ポップカルチャー（マンガ・アニメ）、コンテンツ・メディア（コンテンツ産業・国際メディア）、日本社会システム、多文化共生・異文化間教育、日本語学・日本語教育学、英語教育学、文化関係・文化変容、日本思想の各領域から、国際日本学研究におけるそれぞれの位置づけを提示する。それによって、国際日本学研究との関連性をもった個別研究テーマの設定や研究方法を理解させることを到達目標とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(1 長谷川 文雄／2回) 国際日本学研究の導入と課題を提示するとともに、コンテンツ・メディア研究とりわけコンテンツ産業について取り扱う。</p> <p>(4 高山 宏／1回) 視覚文化とりわけ美学・美術史について取り扱う。</p> <p>(5 瀬川 裕司／1回) 視覚文化とりわけ映画について取り扱う。</p> <p>(18 藤本 由香里／1回) ポップカルチャーについて取り扱う。</p> <p>(6 蟹瀬 誠一／1回) コンテンツ・メディアとりわけ国際メディアについて取り扱う。</p> <p>(21 呉 在煇／1回) 社会システムについて取り扱う。</p> <p>(8 横田 雅弘／1回) 多文化共生及び異文化間教育について取り扱う。</p> <p>(9 山口 仲美／1回) 日本語学及び日本語教育学について取り扱う。</p> <p>(11 アレン キャサリン／1回) 英語教育学とりわけ言語学について取り扱う。</p> <p>(3 尾関 直子／1回) 英語教育学について取り扱う。</p> <p>(15 鹿島 茂／1回) 文化関係・文化変容とりわけ比較研究について取り扱う。</p> <p>(13 渡 浩一／1回) 文化関係・文化変容とりわけ日本文化史について取り扱う。</p> <p>(2 美濃部 仁／1回) 日本思想について取り扱う。</p> <p>(7 白戸 伸一／1回) これまで開講された内容を総括し国際日本学研究の意義について取り扱う。</p>	オムニバス方式
	視覚文化研究（美学・美術史）	1980年代の「新美術史」の台頭、1990年代における脳科学との交渉によって一変しつつある美術史学を、そうした動向をうんだ最広義の思想・思潮の流れの中で捉え直す。従って院生は一応だれにでも手掛りあるヴィジュアル現象との意識的対峙のヒントを得るばかりか、仲々整理のつかない「現代思想」全体の（かつて等閑視されてきた）流れを大略把握できれば目標は達成される。	

特	視覚文化研究 (映画)	映画文化の振興にとって、戦争ほど大きな影響を与えるものはないといわれる。しかし、第二次世界大戦の時期をとってみても、たとえばアメリカでは従来通りの製作が持続されて映画界に空前の活況がもたらされ、ドイツではあえて「無害な娯楽映画」が大量生産されたのに対し、日本では映画界が完全に国家の統制下に置かれ、「戦争遂行に役立つ」映画のみがつくられたといったように、戦争の時期にどのような映画が生産されるかは、国によって大きく異なっている。この授業では、その時期の代表的な日本映画を視聴しながら、「統制された映画」とはどのようなものであったかを観察し、歴史的な文化的背景、政治と映画文化の密接な関係についても考察し、理解を深めたい。比較研究のために、同時期に他国でつくられた映画の断片を視聴する場合もある。	
	ポップカルチャー研究 (漫画・アニメ・ゲーム)	「クールジャパン」というフレーズの下、有望な輸出文化ととらえられつつある日本の漫画・アニメ・ゲーム。これらは主に、20世紀後半以降に特異な発展を遂げた分野であり、現在もサブカルチャーとしての性格が色濃く、その学術的研究は発展途上の段階にある。本講は3人の教員のオムニバス形式により、それらの研究の現況や今日的トピックスを概観するとともに、研究の実践的訓練を行う。 (オムニバス方式/全15回) (18 藤本 由香里/4回) マンガのジェンダー分析・国際展開について取り扱う。 (19 森川 嘉一郎/4回) ゲーム史・おたく文化史・アーカイブ構築と運用の諸問題について取り扱う。 (20 宮本 大人/4回) 漫画史とアニメーション史の研究の現状把握と資料調査法について取り扱う。 (18,19,20 藤本・森川・宮本合同/3回) 受講者各人の研究中間発表及び最終発表を担当教員の専門分野の視点から講評する。	オムニバス方式
修	コンテンツ・メディア研究 (国際メディア)	あらゆる情報が瞬時に世界を駆け巡る現代のメディア社会において、国際的メディアの影響力は拡大している。どのような国際報道がなされ、これからどのように変化していくのかを考察する。具体的な事例を取り上げながら討論を重ねていく。この授業の目的は、受講生が海外メディアに関する十分な知識を得るとともにその価値を分析・研究することにある。	
	コンテンツ・メディア研究 (コンテンツ産業)	日本の成長産業の1つとしてコンテンツ産業に対する期待は高いが、現状では多くの課題を抱えている。今後、ネットを経由したコンテンツ流通が普及してくると、既存のビジネスモデルを大きく変える可能性がある。コンテンツ産業の現状と課題を探ると共に、ネット利用による新たなフォーメーションについて考えたい。	
	コンテンツ・メディア研究 (国際知財)	本授業は、クールジャパンとしてくられるものを文化的知的財産の観点から多面的に捉え、現状を理解し、そこに内在する問題を認識することで、その考察を深めていくことを目的とする。具体的には、グローバル化を前提として、ソフトパワーにつながるパブリックディプロマシーや経済活動としてのコンテンツの収益モデルの観点から、クールジャパンを議論し、その後、より根源的な理解のために、相互矛盾をはらむ著作権、文化、デジタル化という3つの観点から、クールジャパンを解題する。	
科	コンテンツ・メディア研究 (コンテンツクリエイト)	人々に情報提供や感動を伝えるコンテンツの制作は、様々な技術の支援によってなされており、その形態も多様化している。本講義では、音響・音楽・画像・映像・3DCG・ゲーム・ウェブコンテンツなどを対象に、その制作を支援する技術について講義を行う。講義にあたっては多くのデモンストレーションを行う予定であるが、作曲・音響コンテンツ制作、3DCG制作演習、そしてコンテンツ・プログラミング演習の回を設け、「体験」としても理解できるようにする(これらの演習にあたっては基本的なパソコン操作スキルで足りるよう配慮する。)さらに、本講義の最後の3回については、最新のトピックスを織り交ぜながら、コンテンツ制作の未来について考察を行う。	
	日本社会システム研究 A	かつて、近現代における日本の経済成長要因として日本型社会経済システムや日本の経営の有効性が高く評価されていたが、1990年代以降の長期的低迷とともに正反対の評価がなされるようになった。本講義では、「日本型」あるいは「日本的」とされてきた経済システムや経営システムに着目し、それらの成立と変容の過程を歴史的に検討する。そのために経済史的アプローチと経営史的アプローチを用いている諸研究に注目しつつ、日本型社会経済システムの基本構造の理解を深め、グローバル資本主義の浸透による変化と問題点を解明する。	
目			

特	日本社会システム研究 B	原価・品質・納期といったものづくりの競争力指標の背景にはそれを支える仕組みや考え方があがる。この授業では、ものづくりの中核機能である生産・開発・購買といった諸活動の仕組みや原理、考え方を学習し、トータルシステムとしてのものづくりがどのような道筋で企業の競争力に影響を与えるのかを理解することが第一の目的である。そのうえで、「トヨタ生産方式」あるいは「リーン生産方式」と呼ばれる日本のものづくりシステムの特徴を欧米の典型的な生産方式と対比して考えていく。	
	日本社会システム研究 C	イノベーション・マネジメントは現代の日本企業にとって最大の課題の一つである。この授業では、イノベーションとは何か、なぜイノベーションが重要であり、どうしてマネジメントしていかなければならないのかを学習する。具体的には、イノベーションのプロセスのモデルから出発して、研究・技術開発や新製品開発のマネジメント、製品アーキテクチャや企業間関係のマネジメントについてその基本ロジックを学んで、イノベーション・マネジメントの全体像とその競争力との関連を理解することが目的である。	
	多文化共生・異文化間教育研究 (異文化間教育特論)	留学生の学習・生活・心理をいかに支援するかについてのアドバイジング実践について学ぶ。日本語教員や留学生担当の教職員は、留学生の異文化適応の現場に共にいる最も重要な支援者の一人であり、留学生の状況について最もよく知る立場に立つことになる。留学生の背景となる留学制度などのマクロ知識と日常的な接触における支援の仕方などミクロな対応の両者についてケース等を用いて実践的に学ぶ。 また、心理テスト (TPI) を用いた自己分析セッションを最後に実施し、交流分析 (Transactional Analysis) の基礎を学んで、多文化に対応するプロフェッショナルとしての自分の向かうべき方向を掴む。	
修	多文化共生・異文化間教育研究 (多文化共生と地域社会)	現在、日本に居住する外国人登録者は200万人を超えている。また、国際結婚の増加に伴い外国にルーツを持つ子どもが増加するなど、国籍だけでは地域の「多文化」化の状況を正確に把握することが困難になっている。こうした中、各地の地方自治体や国際交流協会、NPO等が、多様な文化的背景をもつ人々が共に生き活きと暮らす「多文化共生」の地域社会づくりに取り組んでいる。本授業では、フィールドワークやゲスト講師の講義、学生自身によるプレゼンテーションとディスカッションを通じて、自治体職員、国際交流協会職員、NPOスタッフ等が、「多国籍・多文化」化が急速に進む地域社会の諸課題を解決するための実践力を習得させる。	
	多文化共生・異文化間教育研究 (留学生政策)	世界的な規模でおこっている学生流動化の動きの中で、国家のとする留学生政策が果たす役割を分析する。少数の優秀なエリート人材が先進国で学ぶ、という形で発展した留学の歴史を概観するとともに、留学が大衆的なものとなった現代の留学事情について学ぶ。留学生の受入、送り出しに果たす政府機関の役割、単位互換や共同学位などの質保証の課題、出入国管理政策、などの実例を分析し、将来に向けた政策的課題を検証する。	
	多文化共生・異文化間教育研究 (国際教育アドミニストレーション)	この授業では、国境や文化圏を超えて活動する職業人が、複雑な社会環境の中で友好的、効率的かつ効果的に行動するために必要な能力、知識、技能および組織インフラについて考える。まず、新しい分野である国際教育の概念を考察し、国際教育事業の実態把握の一環として大学等の国際教育業務および組織内における国際教育部署の位置付けについて調査する。加えて、単一国籍スタッフと多国籍スタッフのチーム間の顧客や業務への対応の違いを比較することにより、国際教育アドミニストレーションのあるべき姿を掘り下げる。	
科	日本語学研究 A	日本語学の研究分野にはどんなものがあるのかといった基礎的な知識・問題の把握から始め、各自がどのような研究を目指しているのかを意識化してもらうことがこの授業の大きな目標である。	
	日本語学研究 B	日本語学研究の諸分野を踏まえた上で、語彙・語誌の歴史的研究に特化する。その研究を行うための考え方・資料の調べ方などを、従来の論文を読むことによって習得していくことを目標にする。	
	日本語教育学研究 A	人間は事態を把握し、把握した事態を言語化するが、その事態把握・言語化には言語によって好まれる傾向があり、(好まれる言い回し)を逸脱した文は、たとえ文法的であっても、母語話者には自然さを欠くと感じられる。この講義では、日本語母語話者に顕著な、事態に密着した臨場的な事態把握の傾向を具体的な事例を取り上げて論じる。また、日本語に特徴的な事態把握を他言語と対照し、日本語教育において留意すべき点を検討する。	
目	日本語教育学研究 B	日本語母語話者は言語化に際して、事態に密着して主観的に事態を把握する傾向が強いが、聞き手との関係においては共同注意志向が強く、聞き手と共同で語る傾向を見せる。この講義では、無助詞や指示語など、共同注意態勢にある聞き手を前提に成り立つ会話の具体例を取り上げて論じる。さらに、現在ある日本語教科書の問題点を指摘し、認知言語学をふまえた日本語分析が日本語教材や指導法の開発においてどのように貢献できるかを考える。	

特	応用言語学研究 (第2言語習得理論A)	<p>(英文)</p> <p>The course focuses on Second Language Acquisition (SLA) that refers to the study of how individuals learn a second language, a language in addition to their native language. It is the study of why some individuals cannot achieve the same degree of proficiency in a second language as they do in their native languages. It is also the study of why some individuals learn faster than others in the same classroom.</p> <p>(和訳)</p> <p>この科目では、母国語に加え第二言語をどのように習得するかという研究に触れる「第二言語習得論」について考察する。なぜ母国語と同じように第二言語を習得することができないのかについて研究する。また同じ授業を受講している教室内で第二言語の習得になぜ違いがあるのかについても研究する。</p>	
	応用言語学研究 (第2言語習得理論B)	<p>この科目では、英語を第二言語として学ぶ学習者にアカデミックな英語の書き方を教えるのに必要な理論と実践について学ぶ。授業はテキストをもとに講義と演習を融合させた形で行われるが、各項目についての理解度は、中間テスト、最終テストによって図られる。また、受講者は学んだ内容について創造的に発展したものを英語でレポートとしてまとめ、最後の授業時に発表し、提出する。英語のライティングにはさまざまなジャンルがあるが、アカデミックな英語の文章を構築していくのに必須である語彙的特徴と重要な文法項目についての理解を深め、その教授法について自分のスタイルを見出すことを目標とする。</p>	
修	応用言語学研究 (社会言語学)	<p>(英文)</p> <p>Sociolinguistics focuses on the relationships between language and society. However, the ways in which language are used and the contexts where it is used demonstrate that these relationships are not neutral. Language practices are used to maintain power. This course critically analyses how language is used in different contexts, especially the relationships between language, power, and identity. These relationships are illustrated with examples from a variety of contexts such as advertising, newspapers, television, and institutions like schools.</p> <p>(和訳)</p> <p>この授業では、社会言語学、つまり言語と社会の関係について考察する。しかしながら、言語が使用される方法や背景は、これらの関係ははっきりしないことを論証している。言語の訓練は知力を維持するために用いられる。この授業では異なった背景特に言語、知力、アイデンティティの関係においてどのように言語が使用されるかを注意深く分析する。これらを広告、新聞、テレビ、そして学校等の組織のような様々な背景の例をあげて説明していく。</p>	
	英語教育学研究 (学習指導要領と指導法)	<p>新学習指導要領では、中学の「英語」では、コミュニケーション能力の養成が強調され、高校の「コミュニケーション英語」では、4技能が統合された英語能力の育成、「英語表現」では、スピーキングとライティングの発信力の養成に力点が置かれ、「英語の授業は英語で行う」ことが基本とされる。中等教育での英語教育が大きく変化しようとしている時代にふさわしい英語教授法の理論と実践をこの授業で身につける。生徒が英語を好きになり、コミュニケーション能力や論理的な思考力を身につけ、最終的には、積極的に英語を学ぼうとする自律した学習者になるには、どのような英語の授業をすればいいのかを共に真剣に考えたい。</p>	
科	英語教育学研究 (音声理論と指導法)	<p>1940年から1950年代のaudiolingualismにおけるminimal pair drillsが音声指導方法としては有名であるが、英語教授法が変化するにつれ、音声指導法も変わりつつある。最近では、オーラルコミュニケーションやリスニングにおいて聞き分けることができないと支障をきたす、高い機能性を持つ分節音素や超文節音素の両方の重要性を認識した指導法が主流になりつつある。本授業では、母音、子音、ストレス、リズムなどの音声システムを学習しつつ、音声リスニングや文法などの他の言語分野とどのような関係にあるのかについても研究する。</p>	
	英語教育学研究 (マテリアル・デベロップメント)	<p>英語教材の開発に深く関与する要素を見極め、さらに教材を開発する力を養う。そのために、シラバスデザインの基礎と種類を探索し、第二言語習得理論の知識、教育理論や実践などを探求する。これらの知識をもとに、現在広く使われている、外国語学習者のための語彙、リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング、CALLの教材を分析し、評価する。また、レッスンプランを実際に作成し、授業のデモンストレーションを行う。</p>	
目			
特	英語教育学研究 (英語教授法)	<p>Communicative Language Approachの枠組みのなかで、英語教師に必要とされるさまざまな概念や理論を学習する。英語教師は、授業を実施する際に、学習者要因、環境要因などの要素を考慮しつつ、さまざまなことを決断しなくてはならない。例えば、学習者の言語能力を養成するには、授業をどのように組み立て、どのような活動を取り入れ、どのような役割を教室内で果たせばいいのか、スピーキングやライティングにおける学習者のエラーはどのように扱うべきか、学習者のパフォーマンスをどのように評価するのかなどについて考慮し、授業をデザインする必要がある。このようなことを考慮し、授業の重要な方向性を決断するときに役立つ概念や考え方を考察する。</p>	

修 科 目 特	英語教育学研究 (カリキュラムデザイン)	<p>本授業では、まず、カリキュラムデザインについての基礎を学ぶ。すなわち、カリキュラムを設計する上で必要な、ニーズ分析、ゴール設定、コース内容の決定、シラバスデザイン、教材の選択、カリキュラムの評価などをどのようにおこなうかをできるだけ具体的に考察する。さらに、教師一人ひとりが置かれた環境の中で、基礎知識をどのように応用すればよいのかを検討する。最終的には受講生がカリキュラムデザインまたはシラバスデザインを作成し、プレゼンテーションを行う。</p>	
	英語教育学研究 (スピーチコミュニケーション)	<p>(英文) The purpose of this course is to help you to develop your presentation skills, oral fluency, PowerPoint skills, and research skills. It will consist of two main components:</p> <p>A) Presentations Each student will participate in two presentations - one practice, and one final. The purpose of this component is to provide you with a step-by-step approach to developing a number of basic presentation skills, as well as your oral fluency, PowerPoint skills, and research and summarizing skills.</p> <p>B) Vocabulary Word Cards You cannot express yourself clearly in any language if you don't know the words you need, and just as importantly, if don't know how to correctly use the words you already "know". Therefore, each student will be expected to select words related to his/her presentation topic, to write them on their word cards, and to study them carefully. The purpose of this activity is to help you to develop your knowledge of words beyond their meanings, and to learn how to correctly use them in your speech and writing - with a focus on the development of collocational knowledge and oral fluency.</p> <p>(和訳) 本授業の目的は、プレゼンテーション・スキルの習得に加え、口語を上達させ、パワーポイントや研究のスキルを磨くことにある。学生は、練習および本番の2つのプレゼンテーションを行う。段階的なアプローチにより、数多くの基礎的なプレゼンテーション・スキルを学び、同時に口語を上達させ、上記のようなスキルを磨いていく。さらに本授業では、プレゼンテーションに関連した語彙の習得にも重点を置く。学生は単語カードを作成し、その語の意味だけではなくコロケーション等の正しい使い方を学び、口語上達に役立てる。</p>	
	英語教育学研究 (レトリック)	<p>(英文) Although rhetoric has had a varied character as an academic subject over the past 2,500 years, today it is a discipline which teaches the skills involved in persuasive writing in an academic setting, and usually focuses on essay writing. This course covers essay types such as compare and contrast, cause and effect and argumentative essays, and involves one short and one long essay project. Since this is also an English as a Foreign Language writing course, it will equip students to recognize, and avoid, transference errors that occur when writers use formatting styles, grammatical forms and forms of expression that are appropriate for their first language writing rather than for English language writing.</p> <p>(和訳) レトリック(修辞学)は過去2500年に渡り学術的な科目として様々な特徴を見せてきたが、今日それは学問の世界において説得力のある記述に関連した技術を教授する学問分野になっている。そして一般的にはエッセイを書くことを考察する分野になっている。この授業では「比較と対照」、「原因と結果」というようなエッセイのタイプや、論争的なエッセイを扱い、短いエッセイと長いエッセイ各1つずつの研究課題に取り組みます。この科目では外国語ライティングコースとして英語を扱うため、受講者は英語で記述するよりもむしろ母国語で用いる記述にふさわしい書式設定のスタイル、文法的フォーマットを用いる時に生じる変換ミスを認識し、また避けることができる。</p>	
リサーチメソッド研究 (量的研究方法)	<p>本授業は、別に開講されるリサーチメソッド研究(質的研究方法)と対になるものであり、両授業の履修によって、社会調査の理論を概観し、具体的な方法の基礎を身につける。本授業は、量的研究方法に関して、特に技法的な側面の理解を中心に、調査の企画、仮説の構築、質問紙の設計、そして統計データ分析のための統計学の基礎を学ぶ。</p> <p>授業の前半では、最初に量的な研究方法について概観し、次に平均、分散などの基本統計量の理解といった基礎的な内容を扱う。後半では、相関係数、回帰分析、因子分析などの多変量解析の基礎にも触れ、これらを想定した質問紙の設計について具体的に学ぶ。</p> <p>これによって、適切な調査の企画ができるようになり、データ収集の技術を身につけ、調査リテラシーを身につけることを目的とする。</p>		

修	リサーチメソッド研究 (質的研究方法)	(英文) Qualitative research focuses on how the individual makes sense of the world. It borrows from many disciplines and thus there is no single method or practice that is privileged. Since qualitative research is multidisciplinary, it uses a multi-method approach, which also provides a deeper understanding of the situation. To enable the researcher to engage in qualitative research, the course introduces a variety of methods that may be used, depending on the questions being asked and the social context. Examples of qualitative research will be analysed and discussed. (和訳) 質的研究は被検体個体が世界にとってどのような意味を成しているかを考察する。この研究は多くの規範を取り入れることになるので、単一のメソッドや特別な慣例には従わない。質的研究は学際的であるので、多数の研究方法を用いる。またそれは状況をより深く理解する力を養う。この授業では、研究者が質的研究に従事するようになるために、尋ねられる質問や社会的背景によって用いられるであろう様々な研究方法を導入する。また、質的研究の例を分析し、議論する。	
	文化関係・文化変容研究 (比較社会)	明治の東京を描いた回想録ないし聞き書きをいくつか読み、東京の変容について考える。取り上げるのは篠田篤造『明治百話』『幕末明治 女百話』、山田花袋『東京の三十年』、淡島寒月『梵雲庵雑話』などである。とくに、これらの回想録や聞き書きに登場する東京の地名に注目して、当時の地図を参照しつつ、文明開化の都の暮らしぶりを具体的な手触りから再現する。	
	文化関係・文化変容研究 (比較文化)	明治・大正・昭和にかけて出版された訳詩集が日本の詩歌に与えた影響について考える。森鷗外『於母影』、上田敏『海潮音』『牧羊神』、永井荷風『珊瑚集』、西条八十『白孔雀』、堀口大学『月下の一群』などのうち、フランスの詩人たちの詩をとりあげ、先人たちがこれを日本語に移し替えるのいかに苦心したかを見ていく。	
科	文化関係・文化変容研究 (比較文学)	比較文学の基本的な考え方や比較文学研究を行う上で基本となる知識を学ぶ。比較文学の研究対象や研究方法および研究史について講義を行い、さらに比較文学研究の実例を挙げながら、この学問領域がどのように発展してきたかを講じる。また、現在、未解明の課題や研究の動向を紹介し、修士論文のテーマ選択に関する問題についてさまざまな角度から検討する。	
	文化関係・文化変容研究 (日本文化史)	「熊野をめぐる信仰文化史」というテーマで、古代以来の日本の代表的神道信仰の一つである熊野信仰の歴史と文化について講ずる。中世から近世にかけての時代を中心に、熊野の神の由来物語である「熊野の本地」の成立とその唱導、熊野比丘尼と呼ばれる女性唱導家の勸進活動(とりわけ、「熊野観心十界曼荼羅」と呼ばれる民衆宗教絵画の絵解き唱導)をメイン・テーマに話してみたい。辺境の地にある熊野の神が全国的な信仰圏を獲得した理由と過程を理解してもらうことが到達目標である。	
	日本思想研究A	日本における武道思想は、中世末に能楽の芸道論に刺激を受けて創出され、近世には仏・儒学の影響をうけてその深化が図られ、とくに禅学から受ける影響は近・現代の武道にも少なからず影響を及ぼしている。また、近世後期になると異国船の出現などの外患を契機として、富国強兵的な論旨のもと新たな武道思想が創出された。本講義では、中世・近世の武道思想について概括的に捉えるとともに、その代表的著作の吟味を通して、日本武道に通底する思想の源流についての理解を深めることを到達目標とする。	
目	日本思想研究B	日清戦争を契機として尚武の気風と愛国精神が重なって「武徳」という思想が復古してゆく。一方で、武士の徳目(武士道)は、近代においてキリスト教信仰や皇国史観などの立場から意味づけがなされてゆく。第二次世界大戦中は武道思想も戦時色の影響を受け、戦後はその反動で占領政策に基づいた民主的な武道のあり方が模索された。近代以降の武道思想は、このように時々々の社会情勢や国際関係との間で大きく揺れ動いてきたが、本来は国境を越えて理解されうる普遍的価値をもつものであり、本講義ではその理解を深めることを到達目標とする。	
	日本思想研究C	明治時代以降の日本の思想を考察する際には、それに影響を与えた東西の思想伝統の意義を十分に認識しておくことがとりわけ重要である。この授業では「自己」に焦点をあて、まずデカルト(1596~1650, フランス)、フィヒテ(1762~1814, ドイツ)、キェルケゴール(1813~1855, デンマーク)の哲学を取り上げる。彼らは皆、「自己」を非常に深く考察した思想家である。その上で、後半には禅の思想を取り上げる。禅の伝統にも、徹底した「自己」の究明が見出される。近代日本思想においても一つの大きな問題である「自己」を、各自があらためて問うきっかけになればと思っている。	
特 修			

科 目	日本思想研究D	西田幾多郎(1875～1945)と西谷啓治(1900～1990)の「自己」理解を問題にする。二人の哲学者はともに、「自己」が物と同じ仕方では存在しているとは考えず、「自己」は、物のあり方を基準とするならば、むしろ無と言わなければならない、無としてリアルである、と考えています。授業では、そこで考えられている無としての自己のリアリティーはどのようなものであるのかを、自己と世界、自己と他者、自己と宗教等についての二人の見方を手がかりに明らかにしたいと考える。
	学術英語コミュニケーション	講義形式による。科目は初級・中級・上級のレベル別に開講し、受講生の英語能力に合わせて実施する。講座の達成目標は、大学院生が国際学会や海外研究者との交流において、共通言語である英語を駆使し、国際的な学術世界へとたどり着くことである。学生は、各段階のレベルを上げ、当該の授業を継続して受講することにより、英語のコミュニケーションスキルを向上させる。授業計画は、レベルにより異なるが、適宜学生の発表の場を設ける等、教員と学生、学生間の双方向的形式により学術的な英語コミュニケーションの実施を恒常的に行う。
研 究	英文学術論文研究方法論	原則は講義形式としているが演習的要素を含め実施する。科目はライティング中心の初級・中級・上級のレベル別及び研究方法論に特化した形式で開講し、受講生の目的や英語記述能力に合わせて実施する。講座の達成目標は、大学院生に国際的な研究方法、英文の記述構成等を身につけさせ、国際的な学術誌への投稿を促進することである。授業計画は、目的やレベルにより異なるが、テーマを設けケーススタディにより恒常的に書くことに親しませる。その他、学術論文において必要なノートテイキング、要約、引用及び校正の方法についても教える。
	国際系総合研究A	アジア地域における平和・環境圏構築をテーマとし、その実現のための諸条件を研究・考察するために、大気や海洋汚染や国際リサイクルなど環境問題、原子力利用やマラッカ海峡の海賊問題、過剰開発など平和に関わる問題など諸問題を取り上げ、学際的アプローチにより学生に複眼的な視点からの理解を促すことを第一に目的とする。またそれらの諸問題に「主体的に関わる」方法や取り組みについて、実務経験者を招聘し、現場での経験を踏まえ国際協力への関わりを検討することを第二の目的とする。授業は各回のテーマに関する専門家、実務経験者をゲスト講師に招きオムニバス講義形式により実施する。
間	国際系総合研究B	講座タイトルを地域コミュニティ・ファシリテーション研究と題し、国民国家の成立と資本主義経済の進行によって、長年にわたって人々の生活・自治単位であった「地域コミュニティ」について、その変遷と今後の展望を、日本とアジア各国の具体的な「地域づくり」「コミュニティ開発」の事例から考え、具体的に現場に関わる際のファシリテーション手法やNPO運営等、実践的な方法論も学ばせる。授業計画は、「コミュニティの原型とその衰退」、「新たなコミュニティ再生～①実例編～」、「新たなコミュニティ再生～②実践編～」の3部構成とし、ワークショップ型の授業を行う。なお、講義は全て英語で実施する。
	国際系総合研究C	“Contemporary Issue in Marketing Management”と題し、大学院レベルでの現代のマーケティング及び企業行動について紹介する。この講義では、米国やヨーロッパにある様々な企業を取り上げて、現在の流行を注意深く分析、統合及び評価できる実用的なスキルを身につけることが目的である。講義ではH&M、IKEA、プリアティッシュ・エアウェイズ・ジャガー、LVMH等の企業と取り上げる。講義は授業のみにならず、ディスカッションや小グループワーク等が含まれる。なお、講義は全て英語で実施する。
科 目	国際系総合研究D	”Japanese Society in the New Millennium”と題し、実際に役に立つ日本の社会及び文化に関する基礎的な知識を深めていく。この講義の目的は3つあり、1.日本の社会及び文化について議論する際に参考となる様々な見解やアプローチについて知識を深める、2.日本の社会及び文化に関する著書・資料を見つけるための基本的な図書検索技術を身につける、3.日本の社会及び文化に関する人口統計データの基礎を身につける、ことである。講義テーマには、“日本人に対する固定観念”、“日本人の家族変化”、“日本人の仕事観”や“海外における日本人”等様々な観点からアプローチしていく。なお、講義は全て英語で実施する。
	学際系総合研究D	会計検査院との連携講座として、「会計検査制度論」をテーマに我が国の会計監査の中心である会計検査院の検査の実態の解説を行う。そして世界的にもユニークな検査院検査が、我が国の地方公共団体、独立行政法人、財団法人などの他のパブリック・セクションの監査に、更には企業会計監査に、はたまた諸外国のSAI(検査院)の監査にどのような影響を与え、応用できるか、また会計検査院の検査の特徴である「実態監査の本質」について、会計士監査との違いや、諸外国のSAIの監査との比較の中で説いていき、講座後半では事例研究を通じて学生に会計検査制度を学ばせる。